

沖縄本島金武方言の体言の アクセント型とその系列

—「琉球調査用系列別語彙」の開発に向けて—

松 森 晶 子

1. 琉球祖語アクセント推定過程における金武方言の位置づけ

松森（2000b）、Matsumori（2001）は、琉球祖語には1音節語に2型、2音節語に3型、3音節語には少なくとも3つの型の区別があったとする前提のもとに「系列」という概念を提示し、琉球祖語に最大3つまで存在していたと（今のところ）考えられるアクセント型の区別をそれぞれ「A系列」「B系列」「C系列」と呼ぶことを提唱した。この「系列」という名称は、それまで松森（1998、2000a）で使用していた「板」類、「息」類、「鏡」類、「刀」類といった、型の区別を示す用語に代わるものとして提案されたものである。

また松森（2000b）では、従来の琉球アクセント史研究が琉球祖体系の再建や方言どうしの系統関係を議論する際に依拠してきた資料が、本土の「類別語彙」を使用した琉球諸方言の記述資料に偏っていたという事実を踏まえ、（特に本土には観察されない）琉球独自の語彙を多くその内部に含めたアクセント調査用語彙集—すなわち本土の「類別語彙」に匹敵するような琉球調査用の語彙のリストを開発すべきであること、そしてそれを使用した組織的調査を早急に琉球各地で実施して、データを収集しておくことの必要性を論じた。

本稿においては、この琉球のアクセント調査を目的として作成される語彙のリストのことを、本土の「類別語彙」とあえて区別するために、「系列別語彙」と呼ぶこととしたい。この系列別語彙は琉球祖語に存在したと想定されるそれぞれの系列に含まれる語彙の、できる限り総括的なリストであることが望ましい。そのためこの語彙の開発は、琉球祖体系にまでさかのぼれると想定される3つのアクセントの系列別を忠実に保っていると考えられる方言体系の調査に基づいて開始されるのが理想である¹⁾。

琉球には、共時的に見て「3型アクセント体系」（あるいはそれ以上の型の区別を持つ体系）とされる方言は数多く存在するが、かならずしもそれら諸方言のすべてがこの「系列別語彙」開発に最適というわけではない。3型アクセント体系の方言であっても、その体系内の一部でこの3つの系列のうちの2つがすでに合流しつつあると思われるような方言も存在する。琉球祖語の型の対立を比較的明瞭に残している、という観点から考えて「系列別語彙」開発のための今後の理想的な調査地となり得る方言体系は、私見では、まず北琉球（奄美・沖縄）においては沖永良部島の一部、徳之島、そして今回取り扱う沖縄本島の北部・中部地域の一部²⁾ などである。また

南琉球（宮古・八重山）においては、与那国と多良間島が、その有力な候補地として挙げられる。

さて、いわゆる「3型アクセント」が観察される沖縄本島の北部、中部の諸地域の中で、琉球祖語に存在していたと想定される「A系列」「B系列」「C系列」の3つのアクセント型の区別が比較的明瞭に保たれ、しかもその各系列に属す語彙が、奄美の沖永良部島、および徳之島の3型アクセント地域におけるそれとも比較的規則的に対応する（とこれまでに筆者が判断した）方言のひとつとして、今回、金武方言を取り上げて記述したい。

本稿では、まず第2節で本土の類別語彙を用いてこの方言の分析を行う。そしてこの金武方言が、松森（1996, 1998, 2000a, b）で提示したような類の分裂、合流の仕方を遂げていること³⁾、すなわちこの金武方言は「類別語彙」の2音節語が12/345/345のような分裂・合流を遂げているだけでなく、3音節語も12/45/4567のような合流を遂げているということを示す。次に第3節では、この類別語彙に対応する語彙の音調型を検討しながら、この金武方言のアクセント体系を導き出す試みを行う。本稿では、この方言はピッチの上昇の位置が弁別的な（上げ核の）方言である、という考えを提示する。また、表層の音調パターンを導き出すためのいくつかのアクセント規則についても論じる。

さらに第4節では、その結果を前提にしながら、類別語彙には存在しない琉球独自の語彙の「系列」を、この方言の資料から「推定」する試みを行う。もちろん今回提示した金武方言の資料だけに基づいて各語の琉球祖語における「系列別」を断定してしまうことはできない。しかしここで提示した資料は、少なくとも今後の琉球調査用「系列別語彙」開発のための基礎的な資料になるものと期待される。

2. 類別語彙を用いた調査から

以下、本稿を通じて、松森（2000b）で提示した琉球祖語にさかのぼれると思われるアクセント型による3つの対立を「A系列」「B系列」「C系列」と呼ぶこととする。またこれら3つの系列のそれぞれに属していたと想定される語彙に関する仮説を「系列別語彙」と呼んで議論を進めていく。本稿の記述のための調査は、2001年3月12～15日にかけて行われた。調査協力者は、金武方言の生え抜きの話者4名である⁴⁾。

〈表1〉は、類別語彙1音節語に対応する語彙の、金武方言における方言形式とそのアクセント型を示したものである。以下すべての表において、金武の方言形にはあえて抽象度の高い音韻解釈を施さず、できるだけ表層の音声に近い形、すなわち音声表記で示すこととした（ただし表記があまりにも煩雑にならないよう、あくまでも簡略表記とする）。なお今回の調査では、すべての語について、その単独形と平行して、それぞれの語に主格の助詞 nu あるいは ga を付けて作成した文（「～ガ見エル」「～ガ残ル」のような意味の文）を発話してもらったものを観察した（以下、これを助詞付接続形と呼ぶ）。後に述べる理由によって、以下の表では、1音節語に限ってはその助詞部分までの形式をその表に載せ、2音節以上の語に関しては、その単独形だけを記すこととする。

また参考のため以下すべての表には、その右端に、それぞれの単語に対応する語の『今帰仁方言辞典』における形式と、それに対して私自身が解釈した「系列」を付記することとした⁵⁾。

〈表1〉 類別語彙1音節語に対応する語の金武方言におけるアクセント型とその系列 (nuは主格の助詞)⁶⁾

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
1	血	ʃi: / ʃi:nu	A	ʃcii	A
1	帆	ɸu: / ɸu:nu	A	ʃpuu	A
1	実	mi: / mi:nu	A	ʃmii	A
2	名	na: / na:nu	A	ʃnaa	A
2	葉	ha: / ha:nu	A	ʃpaa	A
3	木	kiʃ: / kiʃ:nu	B	kiʃi	B
3	酢	suʃ: / suʃ:nu	B	siʃi	B
3	手	tiʃ: / tiʃ:nu	B	tiʃi	B
3	荷	niʃ: / niʃ:nu	B	niʃi	B
3	根	niʃ: / niʃ:nu	B	niʃi	B
3	穂	ɸuʃ: / ɸuʃ:nu	B	puʃu	B
3	目	miʃ: / miʃ:nu	B	miʃi	B
3	湯	juʃ: / juʃ:nu	B	juʃu	B
3	火	çiʃ: / çiʃ:nu	B	piʃi	B
x	齒	haʃ: / haʃ:nu	B	paʃa	B

〈表1〉のIの欄から、金武方言の1音節語のアクセントは、2つの異なる型からなることが確認できる。またその2つの型の区別は、今帰仁方言のそれ(Ⅲの欄)とも明瞭な型の対応を示すことが分かる。この2つの区別は、これまで話者が沖永良部島、徳之島で調査してきた方言の型の区別ともほぼ規則的に対応するので、これは少なくとも北琉球諸方言の祖語にまでさかのぼれる区別であると考えられる。したがって、Ⅱの欄にあるように、この2つの型の区別をそれぞれA系列、B系列と呼ぶこととする。

記述が必要以上に煩雑になるのを避けるため、表中ではピッチの上昇部分だけを「 」という記号によって示してあるが、実際のピッチパターンは、(1)の例に示すようなものである。

(1) 1音節語の具体的ピッチパターン

単独 / 助詞付接続形	単独 / 助詞付接続形	
血 <u>ʃi:</u> / <u>ʃi:</u> nu …	名 <u>na:</u> / <u>na:</u> nu …	[A系列]
穂 <u>ɸu:</u> / <u>ɸu:</u> nu …	齒 <u>ha:</u> / <u>ha:</u> nu …	[B系列]

1音節語にだけ限って言えば、このA、B系列の違いは、単独形より助詞付接続形において、よりはっきりと観察できるようである。すなわちA系列に対応する語は、高く平板に発音される(助詞が付くとその助詞も含めて語句全体が高くなる)のに対して、B系列のものは、低く始まり語末の1モーラだけが上昇するという特徴がある。B系列の語は助詞が付くとその助詞部分だけが高くなるため、A、B系列の違いは助詞付接続形においてより明瞭に区別できることが(1)から分かる。

これとは逆に、2音節以上の語では、助詞付接続形よりむしろ単独形のほうが、各系列の違いが明瞭になることが今回の調査で明らかになった。(これについては、後述する。) そのため、以下の表では単独形のみを示すこととする。〈表2〉は、類別語彙2音節語に対応する語彙の金武方言における方言形と、そのアクセント型を示したものである。

〈表2〉 類別語彙2音節語に対応する語の金武方言におけるアクセント型とその系列

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
1	飴	?ami	A	?a[mii	A
1	牛	?uʃi	A	hu[ʃii	A
1	風	kaʒi	A	ha[ʒii	A
1	傷	kiʒu	A	ki[ʒii	A
1	口	kutʃi	A	ku[ʃii	A
1	腰	kufi	A	hu[ʃii	A
1	酒	saki	A	sa[kii	A
1	袖	sudi	A	su[dii	A
1	箱	haku	A	pa[huu	A
1	鼻	hana	A	pa[naa	A
1	羽	hani	A	pa[nii	A
1	筆	ɸudi	A	pu[dii	A
1	星	ɸu:ʃi / ɸu:ʃi]nu	A	pu[ʃii	A
1	水	mizu	A	mi[ʒii	A
1	へそ	ɸusu	A	pu[ʃuu	A
1	砂	sunu	A	si[naa	A
1	烏賊	?itʃa	A	hi[caa	A
1	溝	n:dʒu	A	[ʒuu, [mi]ʒu	A, C
1	枝	juda	A	ju[daa	A
2	石	?iʃi	A	[?i]ʃi	C
2	歌	?uta	A	hu[ʔaa	A
2	音	?utu	A	hu[ʔuu	A
2	紙	kami, kabi	A	ha[bii	A
2	牙	ʃi:ba	A	[ʃii]baa	A
2	橋	haʃi	A	pa[ʃii	A
2	人	tʃu:	A	[ʃuu	A
3	綱	?a:mi[ʃ:	B	?ami[ʃi	B
3	芋	mu[ʃ:	B	?umu[ʃu (さつまいもの意)	B
3	色	?i:ru[ʃ:	B	?iru[ʃu	B
3	草	ku:sa[ʃ:	B	kusa[ʃa	B
3	雲	ku:mu[ʃ:	B	kumu[ʃu	B

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
3	米	ku:mi┘:	B	humi┘i	B
3	島	ʃi:ma┘:	B	sima┘a	B
3	角 (つの)	ʃu:nu┘:	B	cinu┘u	B
3	糠	no:ka┘:	B	nuka┘a	B
3	波	na:mi┘:	B	nami┘i	B
3	花	ha:na┘:	B	pana┘a	B
3	山	ja:ma┘:	B	jama┘a	B
3	汁	ʃi:ru┘:	B	siru┘u	B
3	豆	ma:mi┘:	B	mami┘i	B
3	耳	mi:mi┘:	B	mimi┘i	B
3	馬	ma┘:	B	ma┘a	B
4	板	?i:ta┘:	B	hica┘a	B
4	瓜	?u:i┘:	B	?u┘i	B
4	傘	ka:sa┘:	B	hasa┘a	B
4	肩	ka:ta┘:	B	hata┘a	B
4	角 (かど)	ka:du┘:	B	hadu┘u、	B
4	汁	ʃi:ru┘:	B	siru┘u	B
4	味噌	mi:su┘:	B	misu┘u	B
4	糞	n:nu┘:	B	minu┘u、 nu┘u	B
4	麦	mu:ʒi┘:	B	muzi┘i	B
4	藁	wa:ra┘:	B	wara┘a	B
5	雨	?a:mi┘:	B	?ami┘i	B
5	腿	mu:mu┘:	B	mumu┘u	B
5	夜	ju:ru┘:	B	juru┘u	B
3	瓶	ka:┘mi	C	┘ha┘mi	C
3	浜	ha:┘ma	C	┘pa┘maa	C
3	鞠	ma:┘i	C	┘ma┘i	A
3	骨	φu:┘ni	C	┘pu┘ni	C
3	蚤	nu:┘mi	C	┘nu┘mi	C
4	糸	?i:┘tʃu, ?i:┘tsu	C	┘?i┘cu (絹糸)	C
4	中	na:┘ka	C	┘na┘haa	C
4	白	?u:┘su	C	┘?u┘si	C
4	海	mi┘:	C	┘?u┘mi	C
4	舟	φu:┘ni	C	┘pu┘ni	C
4	篋	çi:┘ra	C	┘pi┘raa (除草などに使用する)	C
4	松	ma:┘tʃu	C	┘ma┘ci	C

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
4	針	ha:ʔi	C	ʔpaʔi	C
5	桶	ʔu:ʔki, wu:ʔki	C	ʔhuʔki	C
5	陰、影	ka:ʔgi	C	ʔhaʔgi	C
5	声	kʷiʔ:	C ?	ʔhuʔi	C
5	猿	sa:ʔru	C	saaʔruʔu	B、C
5	足袋	ta:ʔbi	C	ʔtaʔbi	C
5	露	su:ʔju	C	ʔciʔju	C
5	鍋	na:ʔbi	C	ʔnaʔbi	C

この〈表2〉から、本土の類別語彙2音節語に対応する語には3つの対立が見られることが分かる。この3つの対立は、(一部の例外を除き)今帰仁のそれともほぼ規則的に対応することがこの表から分かる。この3つの区別をA、B、C系列と推定する。

前掲の〈表1〉と同様、この〈表2〉でも金武方言の方言形にはピッチの上昇部だけしか示していないが、実際のピッチパターンは次の(2)の例に示すようなものである。

(2) 2音節語の具体的ピッチパターン

	単独		助詞付接続形		
鼻	hā nā	/	hānā nu	…	[A系列]
花	hā: nā:	/	hā: nā nu	…	[B系列]
浜	hā : mā	/	hā : mā nu	…	[C系列]
	(hā : mā	/	hā : mā nu …, hā : mā nu …)		

すでに(1)で示した1音節語の場合と同様、2音節語においても、A系列は全体的に高く平板な音調型で出現していることが(2)から分かる。一方、B系列はhā: nā:のように単独では最後の音節が長音化して、そこに上昇調が実現するが、助詞付接続形になるとhā: nā nu…のように、語頭の1音節だけが高くなる。またC系列は、単独形ではhā: mā (浜)、nu: mī (蚤)のように語末の音節だけが上昇する場合が多かったが、それと平行してたとえばnu: mī (蚤) nā: bi (鍋) ʔu: su (臼)のように2つの山が出現する場合もあった。しかしこれも助詞付接続形になると、nu: mī nu… (蚤が)、nā: bi nu… (鍋が)、ʔu: su nu… (臼が)のように語末のほうの山が消え、語頭だけが高くなることがある。

このような理由のため、この金武方言では2音節語のB系列とC系列は、単独形ではhā: nā: (花) 対 hā: mā (浜)のように、上昇位置の違いによって両者がはっきりと区別できるのに対し、接続形になるとその違いが不明瞭になる場合があった。接続形においては、両者とも語末の上昇が消滅してしまい、またB系列の語末音節の長母音も短音化してしまうため、hā: nā nu… (B: 花ガ…), hā: mā nu… (C: 浜ガ…)のように実現してしまう傾向にあるためである。ただしC系列のほうには、依然としてhā: mā nu…のように低く始まって語末の助詞だけが高く出現した

り、*ha : ma nu*…のように低平調で出現⁷⁾する場合が多かったため、両者の対立はこの点において、接続形でも完全に中和してしまっているわけではない。

またこの方言の2音節語においては、B、C両方の系列において、その第1音節が長音化していることが、(2)から分かる。すなわち金武方言の2音節語では、単語単独発音の場合にB系列の語の語末音節が長音化していることに加えて、語末から2つめの音節も長音化しているのである。一方、同じ表に示された今帰仁方言では、B系列の語はすべて、語末音節に限って長音化していることが分かる。

今、C系列の場合だけに限って言えば、このように語末以外の音節が長音化する現象は、琉球諸方言の中でも決してめずらしい現象とは言えない。たとえば筆者のこれまでに調査した範囲内と言うと、沖縄本島北部の伊平屋島、伊是名島、沖縄本島北部の東村川田や名護市安和、徳之島の天城町の多くの方言などにも、C系列の第1音節に長母音が出現する体系が存在している(松森1996, 1998)。また『沖縄語辞典』によれば、首里方言においても「息/ʔiici/」「糸/ʔiicu/」「中/naaka/」「松/ma:çi/」など、本稿のC系列に相当する語彙の語頭に長母音が存在することが確認されている。ここから、C系列の「浜 *hama*」、「中 *naka*」、「松 *ma:tʃu*」などの語に観察される第1音節の長母音は、少なくとも北琉球諸方言(奄美・沖縄)の祖語の段階において、すでに存在していた可能性があると考えてよいだろう⁸⁾。

一方、2音節語のB系列の語頭音節が長音化するというような方言は、琉球全体の中でも他にあまり例を見ないものである。ちなみに中本(1981)の地図を参照しながら、B系列の「味噌」「雨」「潮」という語の第1音節が長音化して *mi:su*、*ʔa:mi*、*ʔu:su* のように出現する地域が琉球のどのあたりに分布しているかを検討してみると、金武町、恩納村を中心とした沖縄本島中部だけに限定されていることが分かる。したがって、この「2音節語のB系列の語彙の第1音節に長母音が登場する」という事実は、この金武方言のアクセントの際立った特徴のひとつであると言ってもよいだろう。

つまり、この金武方言のC系列の「浜 *hama*」、「中 *naka*」などの語頭長音節は、通時的に見て、かなり古い段階までさかのぼれる可能性を持つのに対し、B系列の「花 *hana:*」、「豆 *ma:mi:*」などの語頭長音節は、比較的新しい変化によって生じたものと考えてよい。このB系列の語頭長音化は、奄美・沖縄の諸方言がある程度分岐を遂げた後に、この金武を中心とする沖縄本島中部の一地域において独立して生じた変化の結果であることが考えられる。すなわちこれは、名護市史編さん委員会(2006:260)にもあるように、おそらくは他のアクセント型との区別を保つために第1音節の母音が長音化した結果、生じたものと推定してもよいだろう。

以上の表で明らかになった事実、すなわち、A、B、Cの3つの系列によって区別される語彙が、今帰仁におけるそれとほぼ規則的に「型の対応」を示す、という事実は、この金武方言の3音節語にも当てはまる。次に挙げた〈表3〉は、類別語彙3音節語に対応する語彙の、金武方言における方言形とそのアクセント型を示したものである。

〈表3〉 類別語彙3音節語に対応する語の金武方言におけるアクセント型とその系列

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
1	煙	kibuʃi, kiboʃi	A	ki[ʃbuu]si	A
1	踊り	?uɖui	A	[ʃuu]ɖu'i	A
1	鰹	katsuo, katsu	A	ka[ʃcuu]	A
1	飾り	kaʒai	A	ka[ʒa'i]	A
1	竈	kamadu	A	ha[maa]ɖu	A
1	鎖	kusari	A	ku[ʃaa]ri	A
1	車	kuruma[ʃ:]	B	kuru[ʃmaa]	B
1	桜	sakura	A	sa[ʃkuu]ra	A
1	印	ʃiruʃi	A	si[ʃruu]si	A
1	畳	tatami	A	ta[ʃaa]mi	A
1	隣	tunai	A	tu[na'i]	A
1	寝言	nigutu	A	ni[ʒuu]tu	A
1	鼻血	hanaʒi	A	pa[naa]zi	A
1	祭り	matsuri	A	ma[ʃcii]	A
1	昔	muka[ʃi]	C	mukaa[ʃi]	C
1	涎	judai	A	ju[da'i]	A
1	麴	ko:ʒi	A	[hoo]zi	A
2	二人	t'ai	A	[ʃa'i]	A
x	黄金	kugani	A	hu[ʒaa]ni, ku[ʒaa]ni	A
x	力	ʃikara	A	si[ʃkaa]ra	A
4	鏡	kagami[ʃ:]	B	kagaa[ʃmii]	B
4	軍(いくさ)	?ikusa[ʃ:]	B	hi ku[ʃsaa]	B
4	曆	kujumi[ʃ:]	B	ku'ju[ʃmii]	B
4	宝	takara[ʃ:]	B	takaa[ʃra]	C
4	俵	tara[ʃ:]	B	taa[ʃraa]	B
4	袴	hakama[ʃ:], haka[ʃma]	B、C	pakaa[ʃmaa]	B
4	袂	hasami[ʃ:]	B	pasaa[ʃmii]	B
5	油	?anda[ʃ:]	B	?aN[ʃdaa]	B
5	五つ	?itʃitʃu[ʃ:], ?itʃutʃu[ʃ:]	B	hi ciQ[ʃci]i	B、C
5	命	nu:ʃi[ʃ:]	B	?inu[ʃcii], nu[ʃcii]	B
5	枕	makkʷa[ʃ:]	B	maQ[ʃkaa]	B
5	涙	na:da[ʃ:]	B	nada[ʃa]	B
5	胡瓜	kju:i[ʃ:]	B	kii[ʃ?u'i]	B
4	刀	kata[ʃna]	C	hataa[ʃna] (ナタの意)	C
4	扇	?o:ʒi	C	?oo[ʒi]	C

類別	語	I. 方言形 (金武)	II. 推定される系列	III. 『今帰仁方言辞典』の記述	IV. 今帰仁から推定される系列
4	言葉	kutu[ba	C	hutu[ba	C
4	硯	suzu[ri	C	sizii[ri	C
4	筵	mus[su	C	[mu]su	C
4	瓦	ka:[ra	C	haa[ra	C
4	袋	ɸukku[i	C	[pu]ku	C
5	従兄弟	?itʃi[ku	C	hici(i)[kuu	B
5	親子	?ujak[k ^w a	C	?u'jaQ[kwa]a	B、C
5	情け	nasa[ki	C	nasaa[ki	C
5	箒	ho:[tʃi	C	poo[ci	B
5	柱	ha:[ja	C	[pa]jaa	C
5	襷	tasu[ki	C	————	
6	兎	?usa[gi	C	husaa[zi	C
6	鰻	?una[ʒi	C	?unaa[zi	C
6	烏	gara[sa	C	garaa[si	C
6	狐	kitsu[ne	C	————	
6	虱	ʃira[mi	C	siraa[mi, saa[mi	C
6	裸	hada[ka	C	padaQ[ka]a	B、C
6	左	çizai[:	B	pize[ʼi, piza[ʼi	C
7	蚕	kai[ko, kai[go	C	ka[i]gu	C
7	鯨	kuʒi[ra	C	guN[za	C
7	薬	kusu[i	C	kusu[ʼi	C
7	盥	ta:[re	C	tare[e	C
7	島	hata[ki	C	pataa[ki	C
7	一人	tʃu[i	C	[cu]i	C

この〈表3〉から、本土の類別語彙3音節語に対応する語にも3つの対立が見られ、この3つは今帰仁方言のそれと(例外もあるが)ほぼ規則的に対応していることが分かる。この3音節語の金武方言における具体的な音調パターンを具体例をもって示せば、次の例の通りである。

(3) 3音節語の具体的なピッチパターン

	単独形		助詞付接続形		
煙	<u>ki</u> bu ʃi	/	<u>ki</u> bu ʃi nu	…	[A系列]
鏡	ka ga <u>mi</u> ʃ:	/	ka ga <u>mi</u> : nu	…	[B系列]
刀	ka ta <u>na</u>	/	ka ta <u>na</u> nu	…	[C系列]
	(ka ta <u>na</u>	/	ka ta na nu …, katana nu …)		

〈表2〉ですで見たとように、類別語彙2音節語については、この金武方言では、B、C系列

ともに語末から2つめの音節が規則的に長くなっていることが観察された。これに対し、〈表3〉に示した類別語彙3音節語のB、C系列の語彙には、このような規則的な長音化現象は観察されない。すなわち金武方言では、語末以外の音節が規則的に長音化する現象は2音節語のみに限定されていることが、今回の調査で分かった⁹⁾。一方、これとは対照的に、〈表3〉の右に示した今帰仁方言では、3音節語の（B系列の語は語末音節だけが長音化するのに対して）A、C系列の語に、語末から数えて2つ目の音節の長音化が見られる。

さて、この金武方言に特徴的だと思われる第2の現象は、A系列の示す音調型にある。すでに(1)、(2)で見してきたように、この金武方言の1音節語、2音節語のA系列は、全体的に高く平板な音調型で出現していた。しかしこの方言では、3モーラ以上の比較的長い語になると、A系列の音調型に下がり目が実現する。しかも、その下がり目の位置が、常に固定した場所に出現する。すなわちA系列の語は、(4)に例示されているようにまず高く始まり、その高さが語頭から3モーラ目まで持続した後、その後は低く付くのである。

- (4) $\overline{\text{hana}z\bar{i}}$ (鼻血) $\overline{\text{tata}mi}$ (畳) $\overline{\text{kibu}j\bar{i}}$ (煙)
 $\overline{\text{hana}z\bar{i}}\underline{ga}$ … $\overline{\text{tata}mi}\underline{ga}$ … $\overline{\text{kibu}j\bar{i}}\underline{ga}$ …

筆者の観察したところ、この高さの持続はあくまでも3つ目の「モーラ」まであって、3つ目の「音節」までではないようである。このことは(5)の例から推定できる。

- (5) $\overline{\text{ka}z\bar{a}i}$ (飾り) $\overline{?}ud\bar{u}i$ (踊り) $\overline{\text{ko}:z\bar{i}}$ (麴) $\overline{juda}i$ (涎)
 $\overline{\text{ka}z\bar{a}i}\underline{ga}$ … $\overline{?}ud\bar{u}i}\underline{ga}$ … $\overline{\text{ko}:z\bar{i}}\underline{ga}$ … $\overline{juda}i}\underline{ga}$ …

このようにA系列の高さの持続には制限があり、それは語頭から数えて3つめのモーラまでであるが、このような高さ持続の制限はローレンス(2005)の記述した田嘉里方言には報告されていない。(田嘉里ではA系列の語は、長さに関わりなく、一貫して語句末まで高く実現するようである。)このような高さの持続制限は、沖縄本島中北部の他の方言にも広く観察されるものであろうか。また、もしそれが他方言にも観察されるとすればその分布はどうなっているのだろうか。それらA系列に観察される下がり目は、金武方言では3モーラ目直後だが、他の方言でも同じように3モーラ目なのであろうか。これは、この地域の今後の記述調査の課題である。

通時的な観点からは、A系列に見られるこのような方言間の違いは一体どのように(どのような変化の過程によって)生じたのかという点を考察する必要がある。すなわち、このA系列の3モーラ目直後(方言によっては3モーラ目ではない可能性もある)に出現する下がり目は、過去のアクセント型の何らかの痕跡なのか。それともこれは、諸方言がある程度分岐してから、沖縄本島の一部の方言に生じた何らかの新しい変化の結果なのか。また、もしこの下がり目が新しい変化によって後から生じたものだとすれば、それはどのような条件によって生じ、なぜ3モーラ目でなければならなかったのか。こうした問題に関する考察も、今後の課題としなければならない。

ちなみに〈表3〉を見ると、今帰仁方言でも「煙 ki「buu」si」、「畳 ta「taa」mi」、「鼻血 pa

「naa|zi」などの3音節以上のA系列の語には、はっきりした下降が観察されていることが分かる。また『沖縄語辞典』を参照すると、首里方言でも「煙 kibusi」、「隣 tunai」、「鼻血 hanazii」などのA系列の語は「下降型」とされており、3モーラ以上の単語では「通常第2モーラまでが高く、以下のモーラは低く終わりまで平らに続く（国立国語研究所（編）：53ページ）」と記述されている。これらの事実から考えても、A系列に何らかの下降が観察されるという事実は、（少なくとも沖縄本島の諸方言においては）決して特殊な現象ではないと思われる。

3. 金武方言のアクセント体系と系列

さて次に、以上のような語彙の示す音調型をもとにしながら、金武方言のアクセント体系の共時的記述を試みる。

本方言のアクセントの弁別的特徴は、ピッチの「上昇」の位置であると思われる。（すなわち、この方言は上げ核を持つ体系である可能性がある。）この上昇の位置を「核」と呼び、今それを「のような記号で示すとすれば、本方言のアクセント体系には次の（6）のようなものが仮定できる。

（6）金武方言のアクセント体系

	1音節語	2音節語	3音節語	
A系列	○	○○	○○○	（0型）
B系列	○┘	○○┘	○○○┘	（-1型）
C系列		○┘○	○○┘○	（-2型）

すなわち金武方言では、「A系列は無核の型を持ち（0型）、B系列は語末モーラに核を持ち（-1型）、C系列は最後から2番目に核を持つ（-2型）」というように記述できる。またこの方言には、「核の次モーラを上昇させる」というような音調規則が想定できる¹⁰⁾。（これは松森（2000b）で導き出した沖永良部島の和泊や知名方言のアクセント体系と類似している。）

さらにこの方言では、「無核」であるA系列の高さの持続には制限があり、それは「語頭から数えて3つめのモーラまで」と記述できるであろう。したがって、金武方言の共時的な規則としては、次のようなものが想定される。

（7）金武方言のアクセント規則

- a. 核の置かれた次モーラを上昇させる。
- b. A系列の語は、語頭から3つめのモーラまで高さを持続し、その次のモーラでピッチを下降させる。

さて上述のように、この方言の弁別的特徴はあくまでも「上昇」の位置であると考えられるが、この弁別的特徴（核）はこの方言では、接続形においてよりも単独形の場合に最も明瞭に観察できる。すなわちこの金武方言では、核は文中（助詞付接続形）では出現しないことが多いのである。たとえばB系列の「鏡」は、単独では $kaga|mi$ のように語末音節が長音化し、そこに上昇

調が実現することによって始めて語末の核の存在がはっきりと分かるのだが、それが助詞付接続形になると $\overline{\text{kaga}}\text{mi: nu}\dots$ のようにその上昇調は消滅し、それに代わって語頭から2モーラ目の後に下降が生じるのである。

先ほど(4)、(5)の例を挙げながら、A系列の語は3モーラ目直後に下がり目が出現する、と述べた。それに対してB系列の語は、助詞付接続形では2モーラ目直後に下がり目を実現する。つまりA系列とB系列の2つの型の違いは、単独形においては核の有無(上昇が出現するかしないか)によって区別されているのだが、接続形においてはその下降の位置によって、その違いが分かることが多いのである。たとえば3音節語は、接続形では次のように実現する。

- (8) A系列 $\text{○○○}]\Delta \dots$
 B系列 $\text{○○}]\text{○}\Delta \dots$
 C系列 $\text{○○○}[\Delta \dots \quad (\text{○}]\text{○○}\Delta)$

すなわちA系列は、語頭から数えて3モーラ目の直後に下降が見られ、B系列は2モーラ目の直後に下降が見られるため、一見したところ、このA、B系列の助詞付接続形に出現する「下降の位置」が弁別的であるかのように見える。もし残るC系列が、 $\text{○}]\text{○○}\Delta$ のように第1モーラの直後に下がり目(])を持つならば、この方言は下降位置が弁別的な方言と解釈する可能性も考えなければならないように見える。しかしながら(この予想に反して)、(9)に例示したように、3音節語のC系列は接続形で $\text{○○○}[\Delta \dots$ (*katana nu* …)、あるいは $\text{○○○}\Delta \dots$ (*katana nu* …)のように上昇調、あるいは低平調で実現する場合が多く、常に $\overline{\text{○}}]\text{○○}\Delta \dots$ (*katana nu* …)のように第1モーラ直後に下がり目を持って実現するとは限らない。

- (9) $\overline{\text{ku tu}}\text{ba} / \overline{\text{ku tu ba}}\text{nu}\dots \sim \overline{\text{ku tu ba nu}}\dots$ (言葉/言葉が…)
 $\overline{\text{?u sa}}\text{gi} / \overline{\text{?u sa gi}}\text{nu}\dots \sim \overline{\text{?u sa gi nu}}\dots$ (兎/兎が…)

したがって下降の位置は、(少なくとも今のところ)この方言の弁別的な特徴とは言えない¹¹⁾。この方言の弁別的特徴は、あくまでも上昇の位置であると考えられる。(これは、2モーラ以上の語になると、助詞付接続形では出現することが少なく、むしろ単語単独形に顕著に実現するものである。)

以上、類別語彙1～3音節語を使って観察してきた特徴をもとに、金武方言のアクセント体系を導きだしてきた。これは、(10)のようにまとめられるであろう。

(10) 金武方言における1～3音節語における型の区別とその系列別

1音節語

血	ji	名	na	[A系列]
帆	φu	菌	ha	[B系列]

2音節語

鼻	ha na			[A系列]
---	-------	--	--	-------

花	ha na [┘]	[B系列]
浜	ha [┘] ma	[C系列]
3音節語		
煙	ki bu ʃi	[A系列]
鏡	kagami [┘]	[B系列]
刀	kata [┘] na	[C系列]

すなわち、金武方言は「上げ核」の3型体系を持ち、「A系列」は無核(0)、「B系列」は語末モーラ核(-1)、「C系列」は語末から数えて2つ目のモーラに核がある(-2)、というような体系を持つと記述される。(もちろん、これはあくまでも類別語彙を基に考察した試案であり、今後、外来語や複合語を調査したデータを追加することによってこれとは異なる体系を想定する必要性が生じるかもしれない。)

以上のような考察に基づき、類別語彙を系列別に分類して示したものが次の(11)である。松森(2000b)で論じた沖永良部島の諸方言と同様、この金武方言でも、類別語彙2音節語は12/345/345、類別語彙3音節語は12/45/4567のような分裂・合流の仕方を遂げていることが、ここから確認できる。

(11) 金武方言の資料に基づいて推定した系列別語彙の一部

■ 1音節語

[A系列]

血 ʃi: 帆 φu: 実 mi: (以上第1類) /
名 na: 葉 ha: (以上第2類)

[B系列]

木 ki: 酢 su 手 ti: 荷 ni: 根 ni: 穂 φu:
目 mi: 湯 ju: 火 ʃi: (以上第3類)

■ 2音節語

[A系列]

鮓 ʔami 牛 ʔuʃi 風 kaʒi 口 kutʃi 腰 kuʃi 酒 saki 袖 sudi
箱 haku 鼻 hana 羽 hani 筆 φudi 星 φu:ʃi 水 mizu 臍 φusu
砂 suna 烏賊 ʔitʃa 溝 n:dʒu 枝 juda (以上第1類) / 石 ʔiʃi
歌 ʔuta 音 ʔutu 紙 kami (kabi) 牙 ʃi:ba 橋 haʃi 人 tʃu:
(以上第2類)

[B系列]

色 ʔi:ru: 草 ku:sa: 雲 ku:mu: 米 ku:mi: 島 ʃi:ma: 汁 ʃi:ru: 角^つ ʃu:nu:
糠 no:ka: 波 na:mi: 花 ha:na: 山 ja:ma: 豆 ma:mi: 耳 mi:mi:
馬 ma: (以上第3類) / 板 ʔi:ta: 瓜 ʔu:i: 傘 ka:sa: 肩 ka:ta: 麦 mu:ʒi:
角^{かど} ka:du: 汁 ʃi:ru: 味噌 mi:su: 蓑 n:nu: 藁 wa:ra: (以上第4類) /

雨 ?a:mi: 腿 mu:mu: 夜 ju:ru: (以上第5類)

[C系列]

瓶 ka:mi 浜 ha:ma 鞠 ma:i 骨 φu:ni 蚤 nu:mi (以上第3類) /
糸 ?i:tʃu (?i:tsu) 中 na:ka 臼 ?u:su 海 mi: 舟 φu:ni 篋 çi:ra (çira)
松 ma:tʃu 針 ha:i (以上第4類) / 桶 ?u:ki (wu:ki)、陰 ka:gi
声 k^wi: 猿 sa:ru 足袋 ta:bi 露 su:ju 鍋 na:bi (以上第5類)

■ 3音節語

[A系列]

煙 kibuʃi 踊り ?udui 鯉 katsuo (katsu) 飾り kaʒai 竈 kamadu
鎖 kusari 桜 sakura 印 ʃiruʃi 畳 tatami 隣 tunai 寝言 nigutu
鼻血 hanaʒi 祭り matsuri 涎 judai 麴 ko:ʒi (以上第1類) /
二人 t'ai 黄金 kugani 力 ʃikara (以上第2類、x類)

[B系列]

鏡 kaɡami: 軍(いくさ) ?ikusa: 曆 kujumi: 宝 takara: 俵 ta:ra:
袴 hakama: 鋏 hasami: (以上第4類) / 油 ?anda:
五つ ?itʃitʃu: (?itʃutʃu:) 命 nu:tʃi: 枕 makk^wa: (以上第5類)

[C系列]

刀 katana 扇 ?o:dʒi 言葉 kutuba 硯 suzuri 筵 mussu
瓦 ka:ra 袋 φukkui 従兄弟 ?itʃiku (以上第4類) / 親子 ?ujakk^wa
情け nasaki 箒 ho:tʃi 柱 ha:ja 襷 tasuki (以上第5類) /
兎 ?usagi 鰻 ?unaʒi 烏 garasa 狐 kitsune (以上第6類) /
虱 ʃirami 裸 hadaka 蚕 kaiko 鯨 kuʒira 菓 kusui 盥 ta:re
島 hataki 一人 tʃui (以上第7類)

松森 (2000a, b)、Matsumori (2001) は、すでに琉球祖語において類別語彙2音節語は12/345/345のような分裂・合流を遂げ、3音節語は12/45/4567のような分裂・合流を遂げていたと推定したが、この金武方言の資料もその仮説を支持するひとつのデータと成り得るだろう。

4. 金武方言から推定される系列別語彙

さて、本土の類別語彙を使った以上のような考察を前提にしながら、次に、類別語彙には存在しない(琉球独自の、あるいは金武をはじめとする沖縄本島地域に特徴的な)語彙について、そのアクセント型から、それぞれの語の系列別を推定する試みを行ってみたい。次の〈表4〉は、金武方言において調査した、類別語彙には対応しない語彙を、その音調型を基に系列別に分類して示したものである。

この表は、まずすべての語彙をA, B, Cの各系列に分類する前に、各語を「植物」、「動物」、「人間関係」、「身体」…といったような意味分野ごとにジャンル分けし、次にそのジャンルごとに区

分けした語彙を系列順（A, B, Cの順）に配列する、という方針をとった。〈表4〉左端の漢字一字の記号は、そのように分類したジャンルを示し、それぞれ次のような意味分野を指すものである。

1. 植：植物・植物部位、 2. 動：動物・動物部位、 3. 人：人・人間関係
4. 身：身体部位・身体関連現象、 5. 食：食物・食物関連語彙、
6. 生：生活関連（衣類、行事、生活場所など）、 7. 道：道具、生活用具、
8. 自：自然現象・場所、 9. 方：方角関係、 10. 時：時間関係、 11. 数：数

このような配列方針は、今後の調査の現場でできるだけ使用しやすいように、という配慮のためである。これは、話者にそれぞれの語を文に入れて発音してもらって、その音調型の違いを観察するような場合に、便利ではないかと考えた。

〈表4〉類別語彙には含まれていない語彙の金武方言における方言形、アクセント型、およびその系列別

〔以下、『今帰仁方言辞典』において、金武方言の各語に対応する語が存在しない場合は——のように示すこととする。また、対応する語は存在するが、それが金武方言の方言形とは規則的な音対応を示さない語である場合は、——（「ju'i A」のようにカッコに入れてその語を示し、その場合は右端の推定系列の欄は空白にすることとする。この表では原則的に下降位置は表記しないが、長いA系列とC系列の語に限っては、その系列の判別のために必要な情報として、〕で示してある。〕

分野	意味	方言形（金武）	系列	参考：『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
1. 植	げっとう	saniŋ]go	A	saN[ni]N	C
1. 植	にんにく	çiru	A	pi[ruu	A
1. 植	びろう樹（くば）	kuba	A	hu[baa	A
1. 植	藻（ほんだわら）	mo:	A	[moo	A
1. 植	にんじん	ʃideku]ni	A	—— (huci[deeku]ni ?)	—
1. 植	種	sani	A	sa[nii	A
1. 植	棘（アダンヤバラの）	ndzi	A	[zii	A
1. 植	小豆	?akama:mi[:	B	haa[ma]mi	C ?
1. 植	茅	ka:ja[:(ga:ja[:(とも)	B	ha'ja'a	B
1. 植	昆布	ku:bu[:	B	kubu[u	B
1. 植	砂糖きび	wu:zi[:	B	'uzi[i	B
1. 植	冬瓜	ʃibu[:	B	sibu[i	B
1. 植	苦瓜	go:ja[:	B	goo[ja]a	B, C
1. 植	韭（葱の意味も）	bira[:	B	bira[a	B
1. 植	糸瓜（へちま）	nabera[:	B	nabee[raa	B
1. 植	蓬	φu:tʃuba[:	B	puQ[ci]ba]a, [pu]ci, [puQ]ci	C
1. 植	落花生	dzi:ma:mi[:	B	ziima[mii	B
1. 植	らっきょう	datt[ɔ[:	B	daQ[co]o	B, C
1. 植	茎（野菜類の）	gu:tʃi[:	B	guci[i	B

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考:『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
1. 植	実	na:iɿ:	B	naɿ'i	B
1. 植	あおさ	?a:ɿsa	C	?aaɿsa	C
1. 植	あだん	?adaɿnu, ?adaɿN	C	?adaaɿni	C
1. 植	苺	?itʃoɿbi	C	hicuuɿbi	C
1. 植	ガジュマル	gaʒibaɿru	C	gaziɿmaɿru	C
1. 植	カボチャ	sumɿbu	C	——(ɿnaNɿkwaN A)	—
1. 植	きのこ	na:ɿba	C	ɿnaɿbaa	C
1. 植	ごぼう	gumɿbo	C	guNɿboɿo	B, C
1. 植	ごま	?uguɿma	C	?iguuɿma	C
1. 植	薄 (ススキ)	guɿiɿtʃi	C	gusiɿcii	B
1. 植	ソテツ	ʃitiɿtʃu	C	sitiiɿci	C
1. 植	大根	de:kuɿni	C	deeɿkuɿni	C
1. 植	みかん	kiriɿbu, kiruɿbu	C	kuniiɿbu, kuNɿbu	C
1. 植	梢 (サトウキビの先端)	su:ɿra	C	ɿsuɿraa	C
1. 植	もずく	sonoɿi	C, B	sunuɿi	B
1. 植	きくらげ	mimiɿgui	C	mimiɿguɿi	B, C
2. 動	蜥蜴	?o:gaɿma	A	——	—
2. 動	蛇	habu	A	paɿbuu (ハブのこと)	A
2. 動	鳩	hatu	A	pooɿtuu	B
2. 動	貝 1 (ほら貝)	bura	A	buɿraa	A
2. 動	魚	ju:	A	ɿ?juu	A
2. 動	鮫、ふか	saba	A	saɿbaa	A
2. 動	飛魚	tubiju	A	tuɿbjuu	A
2. 動	毛虫	ki:muɿʃi	A	ɿkiiɿmusi	A
2. 動	ほたる	bimbiN / bimbiɿn nu	A	——	—
2. 動	尾	dʒui	A	ɿzuu	A
2. 動	猫	ma:jaɿ:	B	ɿmjaɿa	C
2. 動	鼠	wentʃuɿ:	B	?eNɿcuu	B
2. 動	貝 2 (蛤、2枚貝)	keɿ:	B	——	—
2. 動	貝 3 (一般)	n:naɿ:	B	minaɿa, naɿa	B
2. 動	亀	ka:miɿ:	B	haaɿmii	?
2. 動	くらげ (小型のもので刺されることがある)	çi:raɿ:	B	?iraɿa	B
2. 動	蛸	ta:kuɿ:	B	tahuɿu	B
2. 動	蟻	?aikoɿ:	B	?aiɿkoɿo, (ɿ?a'i A)	B, C
2. 動	かまきり	bi:tatoɿ:	B	——	—
2. 動	蝉	mi:ʒuɿ:	B	——	—

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考：『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
2. 動	蝶	haberuː	B	tabeeːruu	B
2. 動	トンボ 1	?akeʒuː, ?akiːʒu	B	haʒeeːza	C
2. 動	トンボ 2	mi:na:kuː	B	—	—
2. 動	ウロコ	?iritʃiː	B	?iriːcii	B
2. 動	蛙	?atabiːtʃa	C	haʒaaːbiːcaa	C
2. 動	豚	waː	C	ː?waːa	C
2. 動	山羊	çiːːdʒa	C	ːpiːzaːa	B, C
2. 動	ヤモリ	jaɾiːma:buːi	C	ːjaaziːmaabuːi	C
2. 動	鳥	garaːsa	C	ːgaraaːsi	C
2. 動	やどかり	?amaːmu	C	?amaaːmuu	B
2. 動	雲丹	kasuːsu	C	ːgasiiːsi	C
2. 動	くらげ	kuraːge	C	—	
2. 動	なまこ	ʃikiːri	C	ːsiciiːri	C
2. 動	ばった	gaːːta	C	ːgaaːtaːa	C
2. 動	ムカデ	mukaːʒi	C	ːmukaaːzi	C
2. 動	たてがみ、とさか	kanːdʒi	C	ːkaNːzuːi	B, C
2. 動	いるか	çiːːtuːi	C, B	ːpiQːtu	C
2. 動	蚊	gadʒaːmu	C	ːgazaːmi	C
3. 人	兄	wi:ki:, ?iki:	A	(?ikiːiːgasiːzaa ?)	—
3. 人	姉	?unai	A	— (?uNːmiːi B, C)	—
3. 人	夫	?utu	A	uːːtuu, ːuQːtuu	A
3. 人	子供 1	kːa:	A	ːkːwaa	A
3. 人	妻	tuʒi	A	ːtuːzii	A
3. 人	友	duːʃi	A	ːduːsii	A
3. 人	人	tʃu:	A	ːcuu	A
3. 人	按司 (アジ、領主)	?aʒiː	B	ːaʒiːi	B
3. 人	弟 (目下の人)	?uttuː	B	ːhuQːtuu	B
3. 人	男	?ikigaː	B	ːikiːːgaa	B
3. 人	女	?inaguː	B	ːinaaːguu	B
3. 人	兄弟	so:deː	B	ːsooːdee	B
3. 人	青年	ni:ʃeː	B	ːniiːːseːe	B, C
3. 人	大工	ʃe:kuː	B	ːseeːkuu	B
3. 人	父	suː	B	ːsuːu	B
3. 人	若い娘	me:rabitaː	B	ːmeeraːːbiNːcaːa	C
3. 人	兄 (目上、年上の人)	ʃiːːʒa	C	ːʃiːːzaa	C
3. 人	家族	jaːːguːna	C	—	—
3. 人	子供 2	waraːbi	C	ːwaraaːːbiːi	B, C

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考:『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
3. 人	孫	ma:ɽga	C	maaɽga	C
3. 人	母	m:ɽma	C	?aNɽma]a	B, C
4. 身	垢	çiŋgu]i	A	ɽpiN]gu	A
4. 身	いびき	hanabu]tʃi	A	—	—
4. 身	足	çisa	A	piɽsaa	A
4. 身	尻	subi	A	ciɽbii	A
4. 身	膝小僧	sunʃi	A	ɽciN]si	A
4. 身	額	çitʃe	A	piɽcee	A
4. 身	へそ	φusu, (bu:ɽsu C)	A	puɽsuu	A
4. 身	ほくろ	?adza	A	?aɽzaa	A
4. 身	ふけ(鱗も)	?iritʃiɽ:	B	?iriɽcii	B
4. 身	しゃっくり	sakubiɽ:, (sakubi] A)	B	siQkaɽbii	B
4. 身	唾	tuppeɽ:	B	cuNɽpe]e	B, C
4. 身	尿	ʃi:baɽi	B	ɽsii (幼児語)	—
4. 身	腕	ke:naɽ:	B	heNɽnaa	B
4. 身	顔	suraɽ:	B	ciraɽa	B
4. 身	踵(かかと)	?a:duɽ:	B	?aduɽu	B
4. 身	すね	su:niɽ:	B	siniɽi	B
4. 身	背中	naganiɽ:	B	nagaaɽrii	B
4. 身	握り拳	tizukumiɽ:	B	tizikuɽmii	B
4. 身	腹	wataɽ:	B	wataɽa	B
4. 身	ふくら脛	kundaɽ:	B	huNɽbaa	B
4. 身	咳	sa:koɽi	B, C	sahuɽi	C
4. 身	白髪	ʃiraɽgi	C	siraaɽgi, siraaɽga	C
4. 身	たんこぶ	gu:ɽφu	C	ɽgu]bu, guQɽbu]i	C
4. 身	顎	?utuɽge	C	huɽtuɽge]e	C
4. 身	頭	subuɽru	C	ciNɽbu	C
4. 身	髪	karaɽzu	C	haraaɽzi	C
4. 身	腰周り(ウエスト)	gamaɽku	C	gamaaɽku	C
5. 食	麴	ko:zi	A	ɽhoo]zi	A
5. 食	飯、稲	mee	A	ɽmee	A
5. 食	昆布	ku:buɽ:	B	kubuɽu	B
5. 食	小豆	?akama:miɽ:	B	haaɽma]mi	C
5. 食	肉	ʃi:ʃiɽ:	B	sisiɽi, siɽi	B
5. 食	粥	?uke:ɽme	C	huɽke]e	B
5. 食	砂糖	sa:ɽta	C	saaɽta]a	B, C
5. 食	塩	ma:ɽsu	C	ɽma]su	C

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考：『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
5. 食	雑炊・混ぜごはん	dʒu:ɸi, dʒu:ɸiɸ:	C、B	duuɸsi]i	B、C
5. 食	卵	ku:ɸga	C	ɸhu]gaa	C
5. 食	豆腐	to:ɸu	C	tooɸpu	C
5. 食	餅	mu:ɸtʃi	C	muuɸci]i	B、C
5. 食	団子	da:ɸgu	C	—	—
6. 生	草履、草鞋	saba	A	saɸbaa	A
6. 生	井戸	sundʒa	A	ciNɸza	?
6. 生	いさり	ʔizai, ʔizai	A	ʔiɸza'i	A
6. 生	いろり	dʒirun]ni	A	— (ɸzi]nu C)	—
6. 生	三味線	san]iɸri	A	ɸsaN]siN	A
6. 生	太鼓	suzumi	A	— (teeɸku C)	—
6. 生	(煤・鍋などの) 汚れ・垢	çiŋgu]i	A	ɸpiN]gu	A
6. 生	相撲	ɸjima	A	simaɸa	B
6. 生	匂い1 (良い匂い)	kaba	A	haɸbaa	A
6. 生	匂い2 (悪臭)	kaʒa, kaza	A	haɸzaa	A
6. 生	着物	ɸjɪnuɸ:	B	cinuɸu	B
6. 生	下駄	ʔa]iʒa]i	B、C	hasiɸza]a	B、C
6. 生	家	jaɸ:	B	ʔjaɸa	B
6. 生	門 (もん)	dʒoɸ:, zoɸ:	B	ɸzo]o	C
6. 生	結婚	ni:bitʃiɸ:	B	nibiɸcii	?
6. 生	銭	dʒi:niɸ:	B	ziniɸi	B
6. 生	労働協力 (労働交換)	ʔi:ma:ruɸ:	B	— (ɸju'i A)	—
6. 生	台所	tung ^w aɸ:	B	tuN]gaa	B
6. 生	松明1 (竹で作る)	te:biɸ:	B	teeɸbii	B
6. 生	戸 (雨戸)	ha]iriɸ:	B	pasiɸzii	B
6. 生	ふんどし	sana]ʒi	C	sanaaɸzi	C
6. 生	手ぬぐい	sa:ɸʒi	C	saaɸzi	C
6. 生	天井	tin]dʒo	C	tiN]zo]o	B、C
6. 生	便所、豚小屋	ɸu]ru	C	ɸpu]ru	C
6. 生	刺青	ha]ʒiɸtʃi	C	paziɸcii	B
6. 生	灸1	ja:ɸtʃu	C	ʔjaaɸco]o	B、C
6. 生	灸2 (よもぎから作成)	ɸu:ɸtʃu	C	—	—
6. 生	シーサー	ɸi:ɸʃi	C	ɸsi]si, (sii]sa]a B、C)	C
6. 生	煤	su:ɸsu	C	ɸsi]si	C
6. 生	松明2 (松で作る)	tubu]ɸʃi	C	tubuuɸsi	C
6. 生	薪	tamu]ɸnu	C	tamuuɸnu	C

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考：『今婦仁方言辞典』の記述	推定系列
6. 生	布団	ʔu:ɽdu	C	ɽʔuɽdu	C
6. 生	ヒンプン (門のところにある目隠しのための塀)	ɕimpuɽi	C、B	piNɽpuɽN	C
6. 生	かんざし	dʒi:ɽha	C	ɽziQɽpa	A
6. 生	ウタキ (拝所)	ʔutaɽki	C	—	—
7. 道	釜	hagama	A	paɽgaaɽma	A
7. 道	鍬	k ^w e:	A	ɽkwee	A
7. 道	斧 1	wu:nuɽ:	B	ʔuuɽnuu	B
7. 道	櫛	sabatɽjiɽ:	B	sabaaɽcii	B
7. 道	瓶 (飲料水を入れる水瓶)	handoɽ:	B	paNɽdoɽo	C
7. 道	椀	makaiɽ:	B	mahaɽ'i	B
7. 道	鋤	ja:ɽjibaɽ:, jatɽiɽba:	B	— (ɽjuzeɽ'i C)	—
7. 道	モッコ (運搬用網籠)	ʔo:daɽ:	B	ʔooɽdaɽa	B、C
7. 道	櫂 (舟の)	je:kuɽ:	B	ʔeeɽkuu	B
7. 道	鋸	nukuɽiriɽ:	B	nooziɽrii	B
7. 道	急須/鉄瓶	su:kaɽ:	B	cuuɽkaɽa	B、C
7. 道	サバニ (刳り舟)	sabaniɽ:, sabaɽni	B、C	sabaNɽni	C
7. 道	銚 (魚を突き刺す漁具)	tu:ɽaɽi	B、C	tuzaɽa	B
7. 道	鎌	ʔireɽra	C	ʔiraaɽna	C
7. 道	杵	kakedʒiɽɽi	C	—	—
7. 道	膳	ʔuɽjiɽki	C	— (zinuɽu B)	—
7. 道	ひしゃく	ni:ɽbu	C	ɽniɽbu	C
7. 道	篋 (大)、しゃもじ	ʔibeɽra (しゃもじ)	C	ʔibeeɽra, ʔibiiɽra	C
7. 道	杵 2	ʔaɽɽuɽmu, ʔaɽoɽmu	C	ʔaziɽmuu	B
7. 道	桶座 (頭上運搬の際に使用)	gaɽnɽjiɽna	C	gaNsiɽnaɽa	B、C
7. 道	篋 (小) (背篋、ビク、手提げ籠)	ti:ɽru	C	ɽtiɽru	C
7. 道	籠 (竹で編んだ浅めのザル)	so:ɽki	C	sooɽki	C
7. 道	籠 (竹で編んだ大きめのもの、棒で担ぐ)	ba:ɽki	C	ɽbaɽki	C
7. 道	脱穀用筵 (藁で編んだ目の粗いもの、穀物を干すにも使用)	nikubuɽku	C	nikeeɽbuɽhu	C
7. 道	水桶	ta:ɽgu	C	ɽtaɽgu	C
7. 道	小刀	ʒi:ɽgu	C	siiɽguɽu	B、C
7. 道	杖	gusaɽnu	C	gusaaɽni	C
7. 道	籠 (頭上運搬用)、脱穀用ザル	mi:ɽo:ɽki, mi:ɽo:kiɽ:	C、B	miiɽzookiɽi	—
7. 道	箸	me:ɽʒi	C	meeɽsi	C
7. 道	斧 (石を削るハンマー)	ju:ɽɽi	C	—	—

分野	意味	方言形（金武）	系列	参考：『今婦仁方言辞典』の記述	推定系列
8. 自	空	tinto	A	「tiN」too	A
8. 自	虹	no:zi	A	——「tiN」toonooziri	—
8. 自	丘	mui	A	「mo」o	C
8. 自	崖、断崖	hanta	A	「paN」ta	A
8. 自	坂	çira	A	「pjaa	A
8. 自	洞窟	gama	A	ga「maa	A
8. 自	陸	?agi	A	?a「gii	A
8. 自	潮（海の）	?u:su「:	B	husu「u	B
8. 自	稲光	kannami「:	B	kaNna「mii	B
8. 自	浅瀬（海の）	çi:ji「:	B	pisi「i	B
8. 自	谷	sa:ku「:	B	——	—
8. 自	土、泥	ntʃa「:	B	mica「a	B
8. 自	太陽	ti:「da	C	「ti」daa	C
8. 自	月	ʃi:「tʃu	C	sicu「u	B
8. 自	池、水溜り	kumu「i	C	humu「i	C
8. 自	城	gusu「ku, gusuku「:	C、B	gusi「kuu	B
8. 自	山の頂上	ʃi:「zi	C	ci「zii	A
9. 方	上	wi:	A	「?u」i	A
9. 方	下	ʃitʃa	A	hi「caa	A
9. 方	東	?agari	A	?a「gaa」ri	A
9. 方	右	ndʒiri	A	zi「rii, zu「rii	A
9. 方	北	niʃi	A	ni「sii	A
9. 方	西	?iri	A	?iri「i	B
9. 方	外	φuka「:	B	hu「ka」a	B
9. 方	南	he「:	B	pe「e	B
10. 時	今	nama	A	「naN」ma	A
10. 時	明日	?a:tʃa「:	B	haca「a	B
10. 時	今日	su「:	B	「ku」u	C
10. 時	暇、隙間	ma:du「:, ma:du「i	B	madu「u	B
10. 時	夜中	junaka「:	B	juunaa「haa	B
10. 時	夜	ju.ru「:	B	juru「u	B
10. 時	去年	ku:zu「i	B、C	huzu「u	B
10. 時	暁	?akatun「tʃi	C	haa「tuN」ci	C
10. 時	朝	ʃitimi「ti	C	si「ti」mi」ti	C
10. 時	明後日	?asa「ti	C	hasaa「ti	C
10. 時	おととい	?ut「ti	C	ʼuQ「ti」i	B、C
10. 時	一昨年	ntʃuna「ti	C	mi「cuna」ti	C

分野	意味	方言形 (金武)	系列	参考：『今帰仁方言辞典』の記述	推定系列
10. 時	昨日	kiꞥnu	C	kinuꞥu	B
10. 時	今年	kunꞥdu	C	(huꞥtaaꞥbi)	—
10. 時	午後	sukaꞥma	C	——(piNꞥmaꞥC)	—
10. 時	再来年	na:nꞥtʃu	C	nnaaꞥmiꞥcu	C
10. 時	梅雨	suꞥju	C	——(nagaaꞥaꞥmiiꞥB)	—
10. 時	来年	jaꞥni	C	jaꞥi	?
10. 時	夕方	ju:samꞥbi	C	——(jooꞥneꞥeꞥB, C)	—
11. 数	二つ	tꞥaꞥtʃu	A	ꞥtaaꞥci	A
11. 数	三つ	miꞥtʃu	A	ꞥmiiꞥci	A
11. 数	六つ	muꞥtʃu	A	ꞥmuuꞥci	A
11. 数	四つ	juꞥtʃu	A	ꞥjuuꞥci	A
11. 数	八つ	jaꞥtʃu	A	ꞥjaaꞥci	A
11. 数	五つ	?itʃitʃuꞥ:	B	hiciQꞥciꞥi	B, C
11. 数	七つ	nanatʃuꞥ:	B	nanaQꞥciꞥi	B, C
11. 数	一つ	tꞥiꞥtʃu	C	tiiꞥci	C

この表は、金武方言（と今帰仁方言）という沖縄本島における特定の方言の資料に基づいた系列別語彙の試案であり、あくまでも一種の「たたき台」であることを最初に断っておかねばならない。これは今後、さらにこの方言の新しいデータを追加することによって検討を加えていくべきものである。また他の方言においても、試案として提示された上述のリストを使用して調査し、この系列別語彙の試案をさらに修正していかなければならない。

5. 系列別語彙を活用した今後の記述研究

「琉球調査用系列別語彙」は、琉球祖語に存在していたと「想定」される語彙のリストであり、各語の属していた系列に関する「仮説」である。「仮説」である以上、新しいデータによって常に検証し、修正を加えていく必要があることは言うまでもない。また「琉球調査用系列別語彙」は、それを開発すること自体が最終目標なのではなく、それを開発した上で、琉球諸方言をさらに網羅的、かつ組織的に調査し、そこで収集されたデータをもとにして、より綿密な通時的（比較方言学的）考察を行っていくことを目的としている。

このように系列別語彙は、まず通時的考察の道具となることを目的として開発されるものであるが、実はこの語彙の開発は、今後の琉球諸方言の共時的な記述研究にも役立つことが期待される。この語彙の開発・確立によって、琉球各地のアクセント体系やアクセントの交替現象、アクセント規則などの詳細を記述したり、諸方言を共通の基盤のもとに比較しながら類型的考察を行っていくことが、いっそう容易になっていくのではないだろうか。このようにして「琉球調査用系列別語彙」は、今後、琉球方言の共時的記述の道具としても有効に機能していくことが望まれているのである。

注

- 1) 3型アクセント体系だけでなく、2型アクセント体系の地域であっても、特定の条件が整えば、比較言語学的方法を用いて、過去に存在したと想定される3つの系列に属す語彙を推定することが可能な場合もあると考えられる。たとえば喜界島では、小野津、志戸桶ではA/B/Cのような系列の合流を遂げているのに対して、赤連、湾、中里など、その他の多くの集落ではA/B/Cのような合流を遂げている。したがってこの2地域を比較することによって、「喜界島祖語」におけるA/B/Cの3種の系列に属す語彙を推定することが、(理論的には)可能なはずである。同様なことが宮古諸島にも言える。
- 2) もちろん沖縄本島の北部の方言すべてが、この3系列の対立を現在も明瞭に残しているとは限らない。たとえば、ローレンス(2005)の^{おおきみ たかざと}大宜味村田嘉里方言における記述研究では、松森(2000b)で提唱した3つの系列を取り入れて、各アクセント型に属す語彙の多くについて、それがどの系列に属すかを推定して付記する試みを行っているが、その資料を見ると、この田嘉里方言では1音節語と2音節語の両方において、A系列とC系列がすでに合流してしまっているようである。(ただし、ローレンス(2005)が系列別に分類している語彙の中には、松森(2000b)では提示されていない語も多く含まれていることに注意。このローレンス(2005)における系列別の推定は、ローレンス氏自身の判断によるものと考えてもよいだろう。)
- 3) この金武方言については、すでに新垣(1996)が類別語彙の2音節語について調査を行い、(1)2音節語では、アクセント型だけでなく母音の長さが明瞭に3つの型の対立の存在を示していること、(2)その2音節語の型の区別は、類別語彙が12/345/345のような合流を遂げているということ、を証明した。この新垣(1996)のデータは、特に(類別語彙の)2音節名詞に的を絞った記述報告であるため、そこから金武方言のアクセント体系の全体像を知ることはできないのだが、少なくともこの記述は、服部四郎(1979a, b)が提示した、琉球祖語における2音節語の類の分裂・統合の仕方についての仮説を裏付ける、ひとつの有力な根拠となったと言えよう。
- 4) 各人についての情報は、次の表に示したとおりである。個人情報保護のため、氏名については記号で示すこととする。

[調査協力者情報]

氏名	性別	生年月日
NM氏	女	昭和11年(1936年)11月28日
KY氏	女	昭和10年(1935年)4月11日
MM氏	男	昭和6年(1931年)10月4日
YT氏*	男	昭和11年(1936年)11月28日

研究協力者の4名のうち、*で示したYT氏のみは、金武町並里の出身である。が、そのアクセントや音調型については他の話者のものと差が見られないと判断したため、その資料を今回の分析に用いた。調査に当たっては、金武町教育委員会に大変お世話になったことを、ここに記して感謝申しあげたい。

- 5) 本稿の各表の右端の今帰仁における系列別は、あくまでも『今帰仁方言辞典』の記述に基づいて著者個人が「解釈」したものであり、著者自身の今帰仁の精密な調査に基づく最終結論ではない。その点、この今帰仁方言の系列別の解釈は現時点ではあくまでも「試案」であることを断っておかねばならない。なお、松森(2000b)で提示した系列別に対応する語彙のアクセント型と、今帰仁村与那嶺方言のアクセント型の規則的対応の可能性については、小川普史氏からご教示いただいた。また、ローレンス・ウェイン氏からは、今帰仁の語彙の系列について、多くの助言をいただいた。記して、感謝したい。しかしながら、本稿の誤りはすべて筆者自身の責任である。
- 6) 『今帰仁方言辞典』で使用されているいくつかの記号に関しては、(筆者のワードソフトに)それに対応するフォントがなかったため、不便ではあるが、以下のようなものに記号を変更せざるをえな

かった。

」 ピッチの下がり目を示す。

- p* [p'] 例 pi'i (火)、piza'i (左)
- t* [t'] 例 ta'taa]mi (豊)、hu'taa (歌)、[taa]ci (二つ)
- k* [k'] 例 si'kaa]ra (力)、[hu]ki (桶)、kumu'u (雲)
- n* [ʔn] 例 [naN]ma (今)、naa[mi]cu (再来年)
- m* [ʔm] 例 maa[ga (孫)、ma[a (馬)

- 7) C系列の接続形が ha:ma nu…(浜が) のように低平調になると、その聴覚印象が、本来高平調で出現するA系列の接続形 hana nu…(鼻が) と似てくる。しかしこれも高く始まる句が後続すると、

〈A系列〉「音」 ʔutu nu ʃikariN̄ (音が聞こえる)

〈C系列〉「声」 kʷi:nu ʃikariN̄ (声が聞こえる)

のように明瞭な違いが現れることから、「高平調」と「低平調」の区別は、この方言では、はっきり保たれていると言ってよいだろう。

- 8) このようにC系列のいくつかの語彙(すべてではない)に限って第1音節に長母音が出現する、という方言は、八重山諸島においても存在する。たとえばこれまでの筆者の調査では、石垣島白保や波照間島においてC系列の「松」(ma:tsi)、「鍋」(na:bi)、「桶」(ʔukki)などに長音節が観察されている。また小浜島においても、「桶」(ʔo:ki)のような長音節を語頭に含むC系列の語が存在する。これらのほとんどは、本稿の「系列」に対応するアクセント型の対立がすでに消滅していると思われる地域、あるいはB、C系列の合流によって2型アクセント体系となってしまった方言である。しかしこれら八重山諸島に断片的に観察される語頭長音節は、あくまでも一部の限られたC系列の語に限って出現するものである。またB系列に属すと思われる「雨」のような語においても/ʔa:mi:/のように第1音節が長音節化する現象も石垣島の一部に観察されている。このような事実から考えても、八重山諸島におけるこれら断片的な語頭長音節のデータは、(現時点では)「琉球祖語においてC系列のすべての2音節語の語頭音節が長かった」というような仮説を裏付ける確たる証拠とはならない、とするしかない。

- 9) 先程、類別語彙の2音節語はたとえば nu:mi, nu:mi nu…(蚕)、na:bi, na:bi nu…(鍋)、ʔu:su, ʔu:su nu…(臼) のように、接続形で語末の核が消え、語頭の1モーラだけが高くなるため、B系列との違いが明瞭でなくなることが多い、と述べた。このことは、類別語彙で3音節語に分類されている一部の語にも言える。たとえば類別語彙では3音節語だが、この方言では音節の脱落、融合によって2音節語に変化してしまっている ha:ja (柱)、ta:re (盥)などの語は、2音節語の「蚕 nu:mi」「中 na:ka」などと同様、助詞付接続形ではその語頭の高い音調のみが出現する傾向が見られた。次のような例が、それを示している。

ha:ja / ha:ja nu… (柱/柱が…)

ta:re / ta:re nu… (盥/盥が…)

- 10) これはまだ全く推測の域を出ていないが、このことから考えて、少なくとも北琉球(奄美・沖縄)祖語には「昇り核」によるアクセント体系を建てるのが可能なのではないか。この点に関連して Matsumori (2001) では、(最終的な判断は時期尚早としながらも)琉球祖語のアクセント体系には、(語頭からではなく)語末から数えて～番目というような仕組みによってアクセントが決定される、次のような体系を「仮定」した。(◎がアクセントの置かれた位置を示す。なお、○、◎で示された単位は、Matsumori (2001) では「音節」としているが、今のところそれがモーラであった可能性も否定はできないので、以下ではそれをあえて明示しないでおく。)

琉球祖語のアクセント体系の仮説 (Matsumori 2001に基づく)

	1音節語	2音節語	3音節語	
A系列	○	○○	○○○	(0型)

B系列	○	○○	○○○	(-1型)
C系列		◎○	○○○	(-2型)
(D系列?)			◎○○	(-3型)

このうちD系列の存在は、今のところ確たる証拠がないため、カッコで囲んで示した。

- 11) A系列の下降とB系列の下降は、その値が異なる（したがって下降の位置はこの方言の弁別の特徴ではない）ということを示す例として、この系列別語彙を使用した複合語アクセントの資料を一部ここに載せる。金武方言では、前部要素の系列がそのまま複合語全体の系列となる、といういわゆる「式保存」が成り立っている。しかし、前部要素がA系列の場合の複合語の下がり目の位置は常に3モーラ目に固定されているのに対し、前部要素がB系列の複合語の場合は、この下がり目の位置が常に固定した位置に出現するとは限らず、複合語全体の音節数が長くなるにしたがって、徐々に語末のほうにずれていく傾向が見られる。たとえばA系列の $\bar{j}u:$ (魚)、 $\bar{t}ui$ (鳥、鶏)、 $\bar{j}ideku\bar{n}i$ (人参) を前部要素に持つ複合語は、その下降位置が3モーラ目から後ろにはずれない ($\bar{j}ideku\bar{n}i\ \underline{3u:f}i$)。これに対して、B系列の $\bar{m}a:\bar{m}i:f$ (豆)、 $\bar{k}u:\bar{b}u:f$ (昆布)、 $\bar{b}i:\bar{r}a:f$ (葱)、 $\bar{j}i:\bar{j}i:f$ (肉) を前部要素に持つ複合語は、その下降位置が常に2モーラ目に固定されているとは限らず、語末上昇の位置が右にずれるのにもなって、語末のほうへとずれていく傾向が見られた ($\bar{j}i:\bar{j}i\ \underline{3u:f}i$) のである。

(a) 後部要素が「汁 $\bar{j}i\bar{r}u:f$ (B系列)」の複合語

前部要素の系列

A	$\bar{j}u:\bar{3}i\bar{r}u:$ (魚の汁)	$\bar{t}ui\ \bar{3}i\bar{r}u:$ (鳥肉の～)
B	$\bar{m}a:\bar{m}i\ \bar{3}i\bar{r}u:f$ (豆の～)	$\bar{k}u:\bar{b}u\ \bar{3}i\bar{r}u:f$ (昆布の～)
	$\bar{b}i:\bar{r}a\ \bar{3}i\bar{r}u:f$ (葱の～)	$\bar{j}i:\bar{j}i\ \bar{3}i\bar{r}u:f$ (肉の～)

(b) 後部要素が「炊き込みご飯 $\underline{d}3u:\bar{j}i$ (C系列)」の複合語

前部要素の系列

A	$\bar{j}u:\bar{3}u:\bar{j}i$ (魚の炊き込みご飯)	$\bar{t}ui\ \bar{3}u:\bar{j}i$ (鶏肉の～)
	$\bar{j}ideku\bar{n}i\ \underline{3u:f}i$ (ニンジン)の～)	
B	$\bar{j}i:\bar{j}i\ \underline{3u:f}i$ (肉の～)	

参考文献

- 新垣友子 (1996) 「琉球方言の母音の長さアクセントの類別—沖縄本島北部・金武方言の場合—」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第25号：51-8. 沖縄キリスト教短期大学
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 仲宗根政善 (1983) 『今帰仁方言辞典』角川書店
- 中本正智 (1981) 『図説琉球語辞典』金鶏社
- 名護市史編さん委員会 (2006) 『名護市史本編・10 言語』名護市役所 名護市『言語』編専門部会
- 服部四郎 (1979a) 「日本祖語について21」『月刊言語』8-11：97-107. 大修館
- (1979b) 「日本祖語について22」『月刊言語』8-12：100-14. 大修館
- 松森晶子 (1996) 「琉球における2音節語第4・5類の語頭長音節をめぐる諸問題」『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点』明治書院 1130-1147.
- (1998) 「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』第114号：85-114. 日本言語学会
- (2000a) 「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙3拍語の合流の仕方—」『国語学』第51巻1号：93-108. 国語学会
- (2000b) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』第4巻第1号：61-71. 日本音声学会

- (2001) “Historical tonology of Japanese dialects”. *Proceedings of the symposium “Cross-linguistic studies of tonal phenomena: tonogenesis, Japanese accentology, and other topics”* ed. by Shigeki Kaji, 93-122. Tokyo University of Foreign Studies: ILCAA.
- ローレンス、ウェイン (2005) 「大宜味村^{たかざと}田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29号：法政大学沖縄文化研究所